

外国人と日本人が共に学ぶ日本語教室 “多文化ハッピープログラム”

団体名 地球っ子クラブ 2000
多文化子育ての会 Coconico
発表者 高柳なな枝

★地域の課題・現状

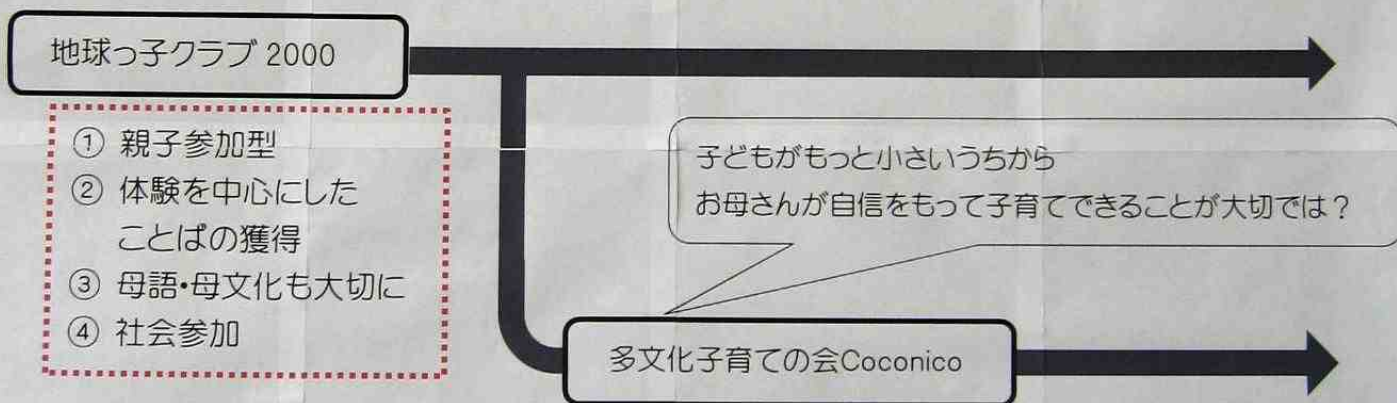
さいたま市の外国人登録者数
1万 6968 人 1.36%
(平成 24 年 1 月 1 日現在)

子どもの数も少ない。
子どもを連れて来日する場合、
日本で子どもが誕生する場合

子どもや親子の日本語教室は
まだ少ない

外国にルーツをもつ子どもの教育について、地域(自治体)や家庭も、積極的・主体的に考えていく必要がある。

★「地球っ子クラブ 2000」・「多文化子育ての会 Coconico」って？



★事業の目的

日本語を学ぶだけでなく、外国にルーツをもつ子どもや保護者(特に母親)が本来持っている能力を地域でも発揮できるような、多文化社会に求められる日本語教室を考える。

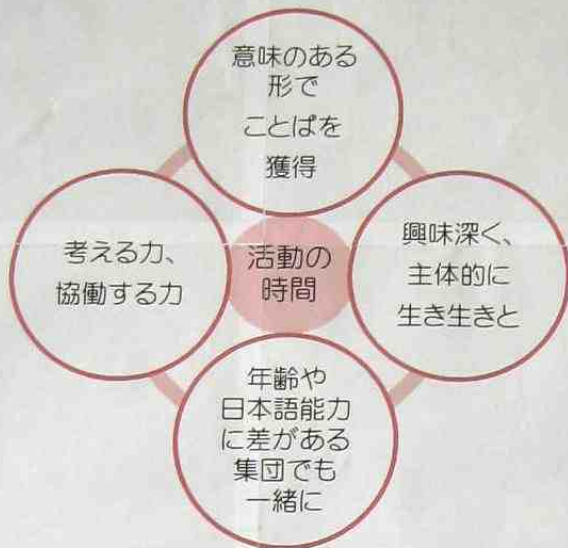
★事業の内容

日本語教室の設置・運営	1. 親子の日本語教室 2. ことばと文化を発信する日本語教室
日本語教室を行う 人材の養成・研修の実施	1. 講座「多文化の町の日本語教室 ことはじめ」 2. 日本人と外国人と一緒に学ぶ共通語としての日本語講座「にほんご畑」
日本語教育のための 学習教材の作成	話題集「多文化子育てハッピープログラム」

★取り組みの内容 <日本語教室の設置・運営>

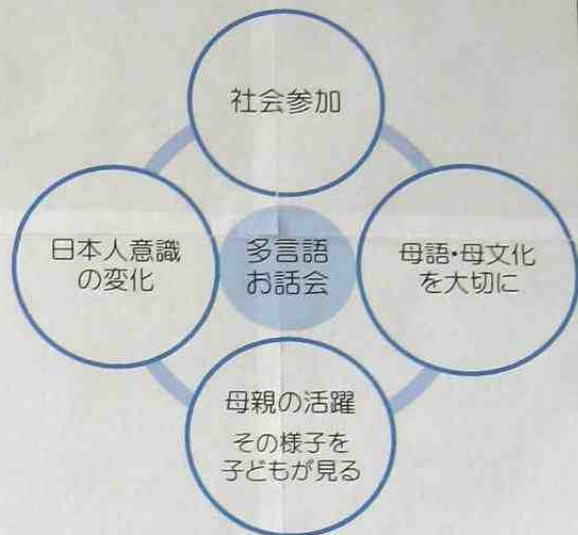
1. 親子の日本語教室

「勉強の時間」と「活動の時間」



2. ことばと文化を発信する日本語教室

多言語絵本の読み聞かせや文化紹介



<活動の時間 はかり>

体験と学習言語が結びつく



<活動の時間 アリの観察>

学習に結びつく体験をする



予測

観察

まとめ

発表

- 子どもたちが落ち着き、課題に取り組めるようになってきた
- 日本語の獲得
- 「はかる」「比べる」「予測する」など学習につながる体験を行うことで、学校生活における学習へのステップに

<活動の時間 カレンダー作り>



- 「教える・教えられる」ではなく、「教え合う・学び合う」に
- 全員にとって挑戦的な課題
- お母さんの活躍

<多言語お話し会>



★成果と課題

- ◆本当に来てほしい人、このような場が必要な人に、どうやって教室の情報を届けばいいのかが。
- ◆教室内ではある程度の成果は見たが、多文化を背景に持つ子どもたちの教育の問題を、教育関係機関や国際関係機関、行政と共有し、連携する必要がある。

★本年度の取り組み

「連携」を事業の主におくプログラム B に応募。

県教育局、市教育委員会、国際交流協会、子育て課、大学などとともに、現状を知らせ、継続的な支援にいかす。

連動性のある地域日本語教育実践

～人材育成・教室活動・教材作成のつながり～

群馬県日本語教育支援政策研究会

群馬県日本語教育支援政策研究会

【活動目的】

群馬県内の生活者としての外国人が抱える生活上の課題の解決につながる日本語コミュニケーション能力の育成、及び、ボランティア日本語教室等で活動する日本語支援者の養成・研修を主な目的とし、群馬県立女子大学教員、群馬県職員を中心に2007年に結成された任意団体

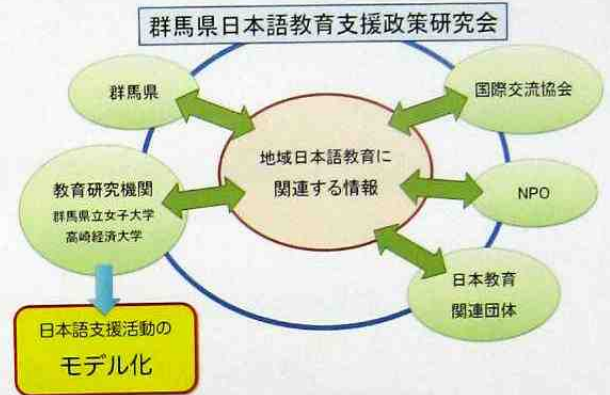
- 伊藤健人(群馬県立女子大学文学部国文学科・准教授/本団体代表)
- 太田祥一(群馬県教育委員会生涯学習課・青少年教育係/本団体事務局)
- 川端一博(日本国際教育支援協会・作務主幹)
- 桑原宣徳(NPO法人伊勢崎ボランティア協会・代表)
- 木暮律子(高崎経済大学地域政策学部観光政策学科・講師)
- 本島靖子(群馬県高崎市国際交流協会・職員)
- 森沙耶佳(日本国際教育支援協会・日本語専門員/本団体事務局)
- ヤン・ジョンヨン(群馬県立女子大学地域日本語教育センター・講師/本団体副代表)

【群馬県の日本語教室の課題】

- ・日本語支援者(ボランティア)の日本語教育に関する専門知識と指導技術への不安
 - ・日本語能力の向上を目指した活動の方法が定まっていない
 - ・生活者としての外国人に適した教材の不足
- ★課題解決のために★
- ・日本語教室で活動する日本語支援者の養成
 - ・生活者としての外国人の生活上の行為に不可欠な日本語能力の習得及び運用能力の向上
 - ・日本語教室で使用する教材の開発

【事業の目的】

群馬県内に定住する外国人住民を対象とした生活上の行為に不可欠な日本語能力の習得及び運用能力の向上を目的とした日本語教室を設置し、また、そこで活動する支援者の育成、および、教材開発を通して、地域日本語教育の推進を図る



【従来の日本語支援者(ボランティア)研修の内容】

- ・地域日本語教育に関する理解
- ・日本語教育の内容や方法
- ・日本語の教え方(文法・文型、漢字、試験対策等)
- ・言語形式の練習の仕方
- ・語句の説明の仕方
- ・生活者としての外国人用の教材
- ・学習者との関わり方
- ・学習者の継続的な参加
- ・新規ボランティアの育成・確保
- ・ボランティアの継続的な参加
- ・他のボランティアとの連携
- ・新規日本語教室の設置方法
- ・従来の日本語教室の在り方の再検討
- ・他の機関(地域社会、学校、企業等)との連携
- ・(日本語ボランティア以外の)地域住民の無関心
- ・日本語教室の役割
- ・日本語支援者(ボランティア)の役割 … などなど

しかし…

- ・なぜこのような研修が必要なのか
- ・生活者としての外国人が日本語教室来て得たいものは何か
- ・養成された人材はどこでどのような活動をしたいのか



すべてのニーズを満たした研修を行うことは不可能

【日本語支援活動のモデル化】

日本語教室が担うべき役割をしっかりと定め、(荒削りでも良いので)モデルを示していく必要がある

【地域日本語教育の目的】

言語・文化の相互尊重を前提としながら、「生活者としての外国人」が日本語で意思疎通を図り、生活できること(文化庁文化審議会国際語分科日本語教育小委員会)



◆「日本語教室」という場の役割◆

日本社会で生活するための日本語学習の場

- 日本語教育の目標
- 教育の計画(シラバス・カリキュラム)
- 日本語教室での活動方法
- 教材
- 評価の方法

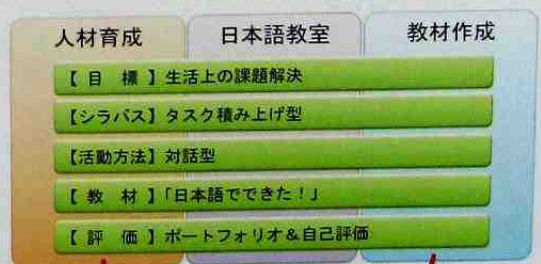
【コーディネーターの役割】

- 研究会の理念のもと、
- ・地域日本語教育のモデルを提案する
- ・地域日本語教育の活動を円滑に、かつ、具現化するためのアプローチを考える
- ・講座や教室の設置に向けてシラバスやカリキュラムを提示する
- ・関連機関との調整を行う

取り組みの全体像

- 【1】日本語教育を行う人材の養成・研修の実施
目的: 地域日本語教育の基礎的な知識・技能を修得し、本団体の「生活上の課題解決のためのタスク積み上げ型」の手法を理解した上で、それぞれの活動で使える教材の作成を行う
対象: 生活者としての外国人に対する日本語教育支援に関わる方
時間: 週1回×3時間(全15回/計45時間)
- 【2】日本語教室の設置・運営
目的: 生活上の課題を解決するための日本語コミュニケーション能力の育成
対象: 生活者としての外国人
時間: 週1回×2時間(全12回/計24(20)時間)
- 【3】日本語教育のための学習教材の作成
目的: 生活上の課題を解決するための日本語コミュニケーション能力の育成
構成: 全10課(20時間分)

3つの事業の連動性



「日本語支援活動のモデル」の共有



[1]日本語教育を行う人材の養成・研修

「ともに学び、ともに作る」

<目的・目標>

この研修を通して地域日本語教育の文脈を理解し、実行できる人材を養成する

- ①地域日本語教育の基礎的な知識を修得する
 - ②本研究会の「生活上の課題解決のためのタスク積み上げ型」の考え方や手法を理解する
 - ③それぞれの活動で使える教材の作成を行う
- <対象者>生活者としての外国人に対する日本語教育支援に携わる方
- <使用教材>自作の教材、および、「日本語でできた!」で使用した教材
- <受講者の総数>17名(出身・国籍別内訳 日本15名、中国2名)
- <受講者の募集方法>
- ・チラシを作成し、高崎市国際交流協会・伊勢崎日本語ボランティア協会等て配布

・群馬県立女子大学の HP、(財)群馬県観光物産国際協会の多文化共生サイトにて掲載

・昨年度までの本研究会が実施したボランティア研修の受講者にメールで通知

★日本語教室への参加(3回6時間程度)は義務

- [第1部]「地域日本語教育の基礎知識(1~5回)」
- 地域日本語教育について考え課題を共有し、実現可能な解決方法を検討
- [第2部]「教室活動(6~10回)」
- 事業[2]の日本語教室での参与観察を通して具体化し、活動の狙いや流れを可視化
- ★養成研修参加者は[2]日本語教室に支援者として参加し、活動内容の解説や意見交換を行った
- [第3部]「教材作成(11~15回)」
- 第1部と2部の研修内容、及び、日本語教室への参観で得た知識・技能・経験を基に、自らが参加する日本語教室で利用可能な教材を作成

人材養成のシラバス(全15回 各3時間)

地域日本語教育の基礎知識(5回) ①~⑤	教室活動(5回) ⑥~⑩	教材作成(5回) ⑪~⑮
①群馬県全域の日本語教育事情 ・群馬県内の外国人の現状と課題 ・在留資格の種類	⑥コースデザインとは ・生活者としての外国人のニーズ把握	⑪教材とは ・教室活動における教材の役割 ・能力記述の内部構造
②各市町村の日本語教育事情 ・伊勢崎市の事例 ・高崎市の事例	⑦シラバスとは ・生活者としての外国人のニーズに応える学習項目	⑫教材の構成 ・ウォーミングアップ(Q&A等) ・タスク1、タスク2(ロールプレイ) ・言語知識(語彙・文型・表現)
③日本語教室のタイプ ・生活支援と日本語支援 ・家庭/職場/学校/地域での日本語 ・やさしい日本語	⑧タスク積み上げ型の日本語教育 ・易しいタスクと難しいタスクの違い ・タスクの構成要素	⑬教材作成 ・アイデアの教材化 ・教材案を使ったシミュレーション
④ニーズ分析 ・日本語学習支援における学習者と支援者の役割	⑨教室活動の実際 ・時系列、活動内容、教育効果の観点から	⑭教材の試用 ・教材案を使ったシミュレーションとフィードバック
⑤学習中の評価の位置づけ ・ポートフォリオとは ・標準的なカリキュラム(案)の紹介	⑩教室活動と評価 ・評価を教室活動や教材にどう取り入れるか	⑮教材の完成 ・全体での講評 ・まとめ

[2]日本語教室の設置・運営「日本語でできた!」

<目的・目標>

- ①生活上の課題を解決するための日本語コミュニケーション能力の育成
 - ②学習者・支援者が共有できる評価方法の考案
 - ③人材養成との連携
- <対象者>生活者としての外国人
- <使用教材・リソース>『標準的なカリキュラム案カリキュラム案』、日本語能力試験 Can-do 自己評価リスト「話す」を参考にした自作教材「日本語でできた!」
- <受講者の総数>
- 7名(アメリカ、フィリピン、中国、ペルー)
- <受講者の募集方法>
- ・日本語教室が開催される高崎市の広報に掲載
 - ・チラシを作成し、高崎市国際交流協会等て配布
 - ・(財)群馬県観光物産国際協会の多文化共生サイトに掲載

・以前の「日本語でできた!」参加者にメールで通知

- タスク積み上げ型シラバス・教材・対話型活動開講前後の自己評価チェックリスト
- 毎回の評価シート
- 研修受講者が日本語支援者として参加

『標準的なカリキュラム案』の活用について

・『「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案』は、主に事業[2]日本語教室のシラバス、教材、自己評価チェックリストの作成時に参考とした

・『標準的なカリキュラム案』の「生活上の行為の事例」の中から以下の5項目を参考にし、シラバス、教材、自己評価チェックリストの作成を試みた

Ⅲ 消費活動を行う	Ⅳ 目的地に移動する
Ⅶ 人とかかわる	Ⅷ 社会の一員となる
Ⅸ 自身を豊かにする	

日本語教室のシラバス(全10回 各2時間)

初回)インタビュー/自己評価チェックリスト	⑤ やめてほしいと思っていることが言えた! ・言いにくい話を切り出す/伝言/説明するために必要な情報を示す/話をうまく終わらせることができる
① 友達ができた! ・あいさつ/出身・来日時期・住まい・仕事など/日本語の学習歴について説明することができる	⑦ うまく断ることができた! ・話の切り出し/断るとき/あいづら/お断りする理由(事情)/断る理由(事情)を説明することができる
② おすすめが言えた! ・自分がほしい情報(もの・場所など)を聞く/おすすめの理由/場所の位置・行き方を説明することができる	⑧ 使い方を説明することができた! ・物の形・色・値段など/欲しい理由/道具の使い方/料理の作り方を説明することができる
③ 問い合わせができた! ・人(外見・様子)/状況説明/苦情/エピソードをまとめて話すことができる	⑨ おおげえができた! ・日程決め/伝言/電話やメールで遅刻や欠席の連絡/食事会の計画や準備などについて話し合うことができる
④ 苦情を言うことができた! ・人(外見・様子)/状況説明/苦情/エピソードをまとめて話すことができる	⑩ 自分の国について説明できた! ・自国の行事/行事で誰が何をするのか/自国の行事を発表/文化的違いを比較しながら説明することができる
⑤ アドバイスができた! ・共通や感想/経験(日常生活・仕事など)を話す/例示しながら説明する/相手の話を聞いて、アドバイスをすることができる	

最終回)インタビュー/自己評価チェックリスト

【成果】

・人材育成と実際の教育現場を結びつけることで、研修参加者は「どのような指導法か、教材は何か、教材の使い方はどうか、クラス運営はどうか、参加者のそれぞれの役割はどうなっているか」などを実際にみることで座学にはない経験が得られた

・教室内容や教材について学べる環境を提供したことで、最終的には自ら教室活動を想定した教材を作成することができた

[1]人材養成に日本語教室への参与観察を取り入れたことにより、研修参加者が日本語支援活動の実際を体験することで、講義では得られない学びや気づきがあった

教材作成では、日本語教室のひな形を提供することにより、教材の定式化が進んだ

[2]自己評価及び毎回の評価シートの記入により、外国人受講生、日本語支援者相互の共通理解が得られた

【地域の関係者との連携による効果・成果】

・平成24年度は群馬県教育委員会、高崎市国際交流協会、NPO 法人伊勢崎日本語ボランティア協会の方に運営委員として参加してもらい、研修講師としてそれぞれの地域の現状や課題等を話してもらい、受講者に地域や立場を超えて共通する課題があることや、逆に、同じ地域日本語教育を行っている地域によって、異なる取組みや課題があることを伝えることができた

・日本語教室やボランティア研修の広報も積極的に行ってもらう、両団体に所属する方々に強くアピールすることができた

【今後の課題】

・研修参加者が[1]人材養成研修で作成した教材を実際に教室活動で用いて、その効果等を評価するフィードバックの機会が得られなかった

・研修実施の会場・回数が十分ではなかった

3つの事業の取り組み

[1] 人材の養成・研修	[2] 日本語教室	[3] 教材作成
①地域日本語教育の基礎的な知識の修得	①生活上の課題を解決するための日本語コミュニケーション能力の育成	①生活上の課題を解決するための日本語コミュニケーション能力の育成に資する教材
②「タスク積み上げ型」の考え方や手法の理解(日本語教室・日本語でできた!への参加)	②学習者・支援者が共有できる評価方法の考案	②学習者・支援者が共有できる評価につながる教材
③上記①②の理解を基に、各地域の活動で使える教材の作成	③「タスク積み上げ型」日本語教室の手法を駆使し、実行できる人材の養成	③「タスク積み上げ型」日本語教室の手法に基づく教材
④②・地域日本語教育の基礎的な知識を持ち、「タスク積み上げ型」の考え方や手法を理解した日本語支援者の養成	④参加者(生活者としての外国人)の生活上の課題を解決するための日本語コミュニケーション能力の向上	④②③・本事業で作成し、事業[2]で使用した10回分の教材
⑤:受講者の作成した教材	⑤:学習記録「今日勉強したこと」(10回分)	

飯田市 地域との協働による日本語教育推進事業 長野県飯田市 (飯田市公民館)

飯田市における日本語教育の現状と課題

飯田市には、公民館、民間団体、中国帰国者支援関係の団体が主催するボランティア日本語教室が 4 か所存在し、それぞれ約 15 年間活動している。飯田市公民館では、1997 年より継続事業として毎週木曜午前中に日本語教室「わいわいサロン」を開催し、学習機会を提供している。しかし、平日昼間に働いている人の受講が難しい現状がある。日本語学習のニーズがありながら、教室の数に限りがあるうえ、大学・日本語学校等の専門機関もないため、十分な日本語教育の提供に至っていない。

地区によっては、

さらに

市・県境に地があることで外国籍市民が
集住しているが、地域住民との交流がない



などの問題を抱えている。

また、飯田市は、電車・バスの路線や本数に限があるなど
公共交通空白地域があり、



「車がないから
日本語教室に通えない」

しかも

複数の教室で
日本語教育を推進するには
人材不足！

ほか、「最終のバスに間に合わないから諦める」といった声も聞かれる。

飯田市公民館が目指す地域日本語教育

飯田市には 20 の地区があり、それぞれの地区に公民館と市の職員が配置され、地域の課題解決に向けて地域住民の自治・自主活動をサポートしている。

地域における日本語教育の課題についても、公民館が主体となり、日本語教室の設置・運営、指導者の育成、教材作成等の体制を整えと共に、コミュニティ意識の醸成と地域の担い手づくりを目指す。

そこで、「生活者としての外国人」のための
日本語教育推進事業を実施！

夜間日本語教室「わいわいサロンⅡ」
地域との協働による日本語教育推進事業を実践



そして、人材を養成し、外国籍市民の集住地区を中心に
日本語教室の設置・運営を目指す！



平成 25 年度は

地域日本語教育実践プログラム (B) で
◆わいわいサロンⅡ (自治会のしくみを知る等)
◆子育て講座 を実施中！！

外国籍市民が
地域の担い手となり

カリキュラム案を基にした教材の作成とその活用

一 磐田地域日本語教室 対話活動のための教材「にほんごで おしゃべりしよう！」
 磐田国際交流協会

事業の概要

名称：生涯学習で実現する多文化共生のまち磐田日本語教育事業

目的

外国人が日本語をつかえ、日本人も外国人とコミュニケーションをとる力を身につけることができる文化・対話の場を実現し、多文化共生のまちづくりに貢献する。

内容

- 日本語教室の設置・運営
 書店併設、西片教室、ワークスペース教室、輪読教室、子どもにほんご教室
- 日本語教育を行う人材の養成・研修の実施
 (仮称) 磐田国際交流協会との協働事業で、日本語ボランティア研修会「やってみよう! 日本語ボランティア」-「教えるから一緒に活動する!」-「へー」を開催
- 日本語教育のための学習教材の作成
 磐田地域日本語教室対話活動のための教材「にほんごでしゃべりしよう!」

地域の背景と課題

平成 24 年 3 月末現在の磐田市の外国人登録者数は 6,702 人で総人口の約 3.9%。国籍は、約 7 割がブラジル、残りがフィリピン、中国となっている。全体的にはブラジル人を中心に減少傾向にあるが、近年フィリピンからの子どもの呼び寄せが増え、中国からの日本人配偶者も増加している。
 磐田市は、平成 24 年 4 月に「第 2 次磐田市多文化共生推進プラン」を策定した。その中の重点施策として「日本語を学びやすい環境の整備」が掲げられている。
 このような背景を踏まえ、地域日本語教室では多文化共生のまちづくりに貢献することを目指し、活動内容も「教える、教えられる」文法中心の教室から、会話を重視した相互学習へと移行しつつある。また、ボランティア説明会を開催し、地域の日本人の参加を促している。

課題

参考：カリキュラム案ガイドブック

- 磐田市に住む外国人
- ・日系南米人 ・日本人の配偶者
 - ・中国帰国者 ・日本企業勤務者
 - ・技能実習生 ・企業内転勤者
- **多文化多言語**
- ・日本語を使用する機会が少ない
 - ・地域社会との関わりが希薄
 - ・日本人と接する機会が少ない
 - ・日本語教室に毎回参加するわけではない

解決方法を考える

参考：カリキュラム案ガイドブック

対話活動を取り入れた日本語教室

- ・地域の日本人と対話や交流をすることができる
- ・地域の行事に参加するきっかけになる
- ・実際の会話で日本語でのコミュニケーション力を養う
- ・一回ごとに完結するので毎回参加できない人も参加しやすい

教材をつくる

参考：教材例集

生活上の課題を 4 つに分類

- 生活情報・・・生活に役立つ情報を得る
- 交友・余暇・・・人と仲良くなる 余暇を楽しむための情報を得る
- 地域社会・・・社会のルールを守り、地域社会に参加する
- 子ども・・・子育てや子どもの教育に役立つ情報を得る

活動方法を 4 つに分類

- 対話
- 発表
- 体験
- 観察

教材集の使い方

全 40 テーマ

用いるもの

テーマの展開例

参考資料

1. テーマ一覧からテーマを選ぶ
2. 各テーマのページを参考に、教室に合った活動内容を考える。

活動例

対話活動の流れ

- 1-2 あいさつ・自己紹介・ゲーム
緊張を解き、話し易い雰囲気をつくる
- 3 グループ分け
日本語レベルをなるべくそろえる
- 4 トピックの提示
その日話すことイメージをつかむ
- 5 対話
 - ① グループで対話
 - ② 全体で共有
他のグループで出た話を共有する
 - ③ 全体(ペア)で対話
一対一で相手と話せながらたくさんの人と話す
- 6 まとめ
話したことを「ふりかえりシート」に書く
学習記録を残す
- 7-8 ふりかえり・お知らせ
全員でその日の感想や気づいたことを話し、次週のテーマ、連絡事項なども伝える



「文化祭」

事前準備：文化祭実行委員会に出席、発表内容の企画、練習、ケーキ作り等
 当日：①ブラジルケーキの販売、接客、呼び込みなども学習者主体で行う。
 ②舞台の練習とクイズの募集などの準備
 ③舞台発表（各国クイズと合唱）
 ④みんなで昼食



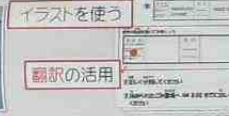
★クイズの内容の相談、ケーキ作りなどの事前準備から、当日の模擬店での販売や舞台発表まで、外国人参加者が中心となり、日本人はそれをサポートしながらすすめた。

「ごみの分別くさど」

磐田市出前講座を利用
 事前準備：市担当者との打合せ (2回)
 当日：①市職員から説明 ②参加者から質問 ③グループで対話
 ④全体で共有

★外国人にわかりやすい配布資料の内容や表記の方法、説明の仕方を担当者に伝え、事前に変更してもらった。

<説明> 参加者に合わせた話し方をする
 (例を挙げてアドバイス)
 実物やイラスト、写真など見て分かるものを用意する



「図書館へ行く!」

磐田市出前講座を利用
 事前準備：図書館担当者との打合せ
 当日：①図書館職員から、図書館の概要、利用方法等の説明
 ②図書館内の見学 ③希望者は利用カードを作成

★これまで図書館に行ったことのない外国人参加者も、この活動を通して図書館を利用できるようになった。



成果

- 外国人参加者の社会参加に繋がった
 - ★磐田市多文化共生社会推進協議会の委員に就任
 - ★磐田市自治会連合会の情報交換会で外国人ゲストとして自国の紹介
 - ★協会主催の「世界の料理教室」講師
- 多様な地域の日本人が参加するようになった
 - ★多様な日本語にふれる機会が増えた
- 交流や体験の活動が増えた
 - ★市内をめぐるバスツアーの実施
 - ★市の出前講座を利用し、図書館体験、ごみ講座、防災講座を実施
- 参加者が気軽に対話活動の進行役を担当できる

教室に来ると元気になります(★)

今後の課題

- ◆ 外国人の地域社会への参加
- ◆ 自治会など他団体・組織との連携
- ◆ 行動・体験中心の活動の充実
- ◆ 日本語力の成長の実感

みんなで話すのが楽しい!



プログラムA

日本人向け

＜1. 学習教材の作成＞

テーマ：地域で使いやすいテキストを考える。

- 【目的】①受講者層とレベルを考慮した学習しやすい/させやすい教材を考える。
②地域ボランティアが共有できるテキスト。

【対象】日本語教室担当者

【概要】「生活者としての外国人」のためのカリキュラム案を基盤にする。

⇒特徴 日系人用(長期滞在者)と
研修生・留学生用(短期滞在者)を作成
例)同じ医療でも、何が必要で、何がなくても何と
か生活できるかを考慮する。

※机上に展示があります。ご自由にご覧ください。



真剣な
学習者



いくつ
書けるかな?

＜2. 研修会 日本語教育を行う人材の養成＞

テーマ：外国人児童生徒への指導

- 【目的】①人材の拡大と確保及び育成。
②正しい知識と情報の獲得。
③プロ講師による的確な支援と指導方法を学ぶ。

【対象】日本語教育の地域ボランティアや学校の教職員

講師	研修会内容(全10回)
薄田直子氏 (大阪府立東淀川高等学校 教諭)	浜松市内立立小中学校の外国人支援の実態と質疑応答
櫻井千穂氏 (大阪大学 言語学専攻 准教授)	外国人児童生徒を対象とした、読書から日本語力を高める指導方法とその効果の測定方法について
三好純太氏 (東海大学GTP-Plus)	こはらのテーブルの教材を使った、身実・丁寧なこはらの指導方法を学ぶ
近田由紀子氏 (大阪大学大学院 言語文化研究科 助教授)	子どもの成長につなげるために学校との連携



地域の人も防災学習



講師：野山広氏

【成果】研究者、小学校教員、発達障害児への言語指導者を招へいたことで、理論だけでなく実践の指導方法を即生かせる内容を揃えることができた。

※机上に展示があります。ご自由にご覧ください。

＜3. ポルトガル語講座＞

- 【目的】①日本語教育を行う上で使用頻度の高いポルトガル語を習得し、支援の助けとする。
②共生問題に双方型学習を取り入れることで日本人側の意識の向上を図る。
③日本人が学ぶ側になることで学ぶ者(外国人)の恩恵を理解する。

【対象】教職員、地域ボランティア、今後活動したい人

【成果】支援者がポルトガル語を学ぶことはボランティア活動の負担が軽減でき、学習者側も心理的に好感度が高く、双方共に有意義であると、受講者から声が寄せられた。



講師：内山ワリソン

外国人向け

地域の構成員である日系人を主としたクラス

- リーマンショック後、永住化が進む。
- 地域の構成員である。
- 日本の生活、ルール、文化を母語でも理解し、それについて日本語で話せる必要がある。

母国で日本を伝える研修生・留学生を主としたクラス

- 最長5年で帰国。
- 母国で日本社会について周知に広める。
- 日本の生活、ルール、文化は母語で理解できれば、それについて日本語で話せる必要がない。

問題

目的

教材

学習者の成果発表

成果

課題

25年度取組

職場や近隣住民との円滑な関係作りを意識し、共生に向けての日本語習得。
日本語を習得し、現在就職している者は安定した雇用に繋げる。

日常生活に必要な会話を中心としたクラス。
滞日の間、充実した生活が送れるようにする。
日本文化や地域の紹介を盛り込んだ日本の生活を楽しめるようにする。

「生活者としての外国人」のための標準的なカリキュラム案を軸にした地域版テキストを編集。

衣食住、近隣や職場での人間関係を主なテーマとしたテキストを作成。

就業中に使える日本語も含むが、滞日中の旅行等の余暇や日本文化を楽しむための日本語を中心に作成。

- ①健康・安全に暮らす
- ②住居を確保・維持する
- ③消費活動を行う
- ④目的地に移動する
- ⑤働く
- ⑥人とかかわる

- ①健康・安全に暮らす
- ②消費活動を行う
- ③目的地に移動する
- ④人とかかわる
- ⑤自身を豊かにする
- ⑥情報を収集・発信する

東海地震をテーマに6クラス合同での学習発表会の実施。

就業中に使える日本語も含むが、滞日中の旅行等の余暇や日本文化を楽しむための日本語を中心に作成。

1. 自分が住む日本のメリット・デメリットを知らながら、それに必要な日本語(防災、避難場所等)を学んだ。
2. 防災用品の試用や防災食の試食を行い、体験的に防災について学んだ。
3. 地域日本人住民も参加し、日々の学習の成果を試す機会となった。

日本語を覚えたいという意識は強く、教室を途中でやめる学習者は少なかった。離職することなく、仕事も日本語学習も続けている学習者が多かった。

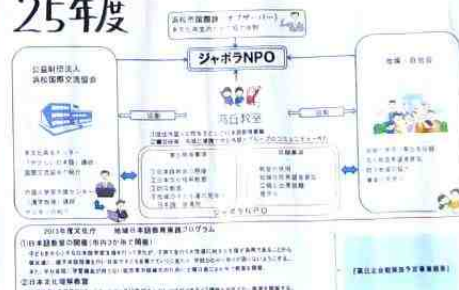
多国籍のクラスであったため、私的な交流も含め、国を超えて学習者同士の結びつきが深くなった。日本語学習を通じてお互いの文化を知り合い、共生していた。

- 時間を守る等、日本社会で生活するために必要なルールや文化の理解やそのために必要な日本語の習得はまだまだ進んでいない。
- 東海地域において絶対に必要であると言われている防災準備にまで結びつかない。「その時にとかなる」という意識の改革は日本語教室だけでは難しい。

- ★ごみ問題や地域の人間関係など共生を意識したようなテーマには興味を持たない。
- ★東北大震災後に来日した者にとっては防災が現実味を帯びた問題ではなく、東海地震について意識が伴わない。

2013年度は 事業(B)を受託。
地域に根差した日本語教室およびテキストの改良。
日本語教室の開催地を増やし、より多くの外国人が学習の機会を得られるようにする。
マナー教室等を地元企業、行政、自治会と協働で行い、外国人と日本人が共に学べる事業を行う。

25年度



Can-do型授業による日本語教室

1 Can-Do型授業とは？

ボランティア日本語教室などが陥りやすい指導法

- ① 文法説明が主となりやすい
- ② ボランティア日本語教育の意義が十分、把握されていない
- ③ 実技・ケーススタディに十分な時間が取られていない
- ④ "Can-do"認識が強調されていない
- ⑤ "Can-do"型授業を教師も経験していない
- ⑥ 文型と文法の差異がよく認識されていない

→ 生活に即役立つ「Can-do型授業」の提案

3 場面絞り込みと動機づけ



2 実例 場面提示(買い物をする)

この回のCan-do = 希望するものを買うことができる



4 スキット提示 ①



セリフを覚え込ませることが目標ではない

- A: すみません。
 B: はい、いらっしゃいませ。
 A: これ、しゅやくしてもいいですか？
 B: はい、こちらどうぞ。

「振り返りシート」を活用した授業例 聖徳大学

5 スキット提示 ②



学習者との対話によって表現を自然に抽出するように授業を進めていく

- A: すみません。
 B: はい、いかがですか？
 A: ちょっとちいさいです。もうすこしおおきいのはありますか？
 B: はい、こちらになります。もうしわけありません。こちらだけになります。

7 「振り返りシート」の例

1 あらたく べんきょうした ことば 3 評価	2 振り返りシート
3 振り返りシート	4 振り返りのコメント
5 振り返りシート	6 振り返りのコメント

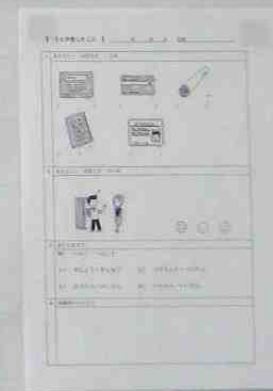
6 例文のいろいろな展開

- ・これ、きて はいて かぶって みても いいですか？
- ・ジョギングシューズがほしいんですが どれか おすすめ ですか？
- ・じゃ、これにします。 これください。 学習者との対話の中から、状況を想定し、モチベーションをつついでいく
- ・すみません、もうちょっと ほかのも みてみます。

8 振り返りシートの意義

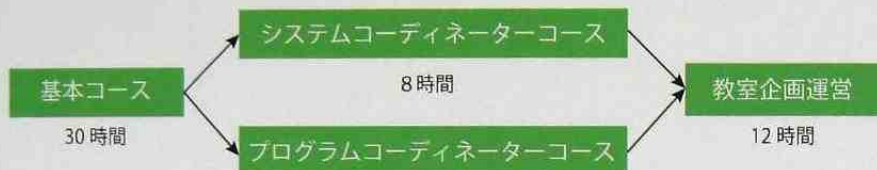
- ・「ティーチング」から「ラーニング」(学習者中心教育)への転換
- ・「教員が何を教えるか」から「学習者が何を学びとるか」への視点の転換
- ・学習者自身が学んでいることを意識化し、確認していく作業
- ・何を評価の目的とするか、だれのための評価とするべきか、どう活用されることを期待するか、を明確にするため
- ・学習者が自身の日本語学習状況を把握し、学習を継続するための評価
- ・学習者が自分の日本語学習を振り返ることができるようにすることが必要

- ・週1回 1~2h
- ・固定率 不安定
- ・教師の研修体制



地域日本語教育「起業家」育成講座

グローバル化の進み中、地域でも多文化共生社会の構築への努力が続けられていますが、その課題解決に日本語教育が大きく関わっています。これまでの地域日本語教育の多くはボランティアを中心とした運営でしたが、継続的な活動には事業として成り立たせ、社会事業として確立することが望まれます。そこで、地域日本語教育を事業化し、社会の取り組みとして地域課題の解決を目指す人材を育成しました。



プログラムコーディネーターはコースの活動内容や目標を考え、多様な人や機関が協働しあう場づくりをする人表します。
システムコーディネーターは地域に必要な日本語教育のグランドデザインを対外折衝など枠組みづくりをする人表します。

講座・実践報告

平成 24 年 9 月 26 日～平成 25 年 2 月 23 日 毎週土曜日

☆基本コース☆ 13:30～16:30

月 日	講義名	講師
1 9月29日	日本語講座	田村 太郎
2 10月6日	起業する外国人	渡邊 和光 株式会社グローバル・エデュケーション
3 10月20日	地域課題解決に向けてつなぐ自分たちの力	堀 永乃
4 10月27日	行政・企業・市民の協働	活動実践講座 企業に学ぶ実践
5 11月3日	コーディネーターの役割	神谷 幸一 株式会社グローバル・エデュケーション
6 11月10日	外国人の労働環境	外国人リーダー
7 11月17日	創業の目的と意義・企業立派	本村 信雄
8 11月24日	ニーズ分析・課題分析	川原 一博 株式会社グローバル・エデュケーション
9 12月1日	社会リソース・地域リソースを考える	堀 永乃
10 12月8日	異文化理解	神谷 幸一 株式会社グローバル・エデュケーション
11 12月15日	ボランティアマネジメント講座	田村 太郎
12 12月22日	異業種企業との協働活動のつなぐ	グローバル・エデュケーション
13 1月12日	フィシリテーションを学ぶ	土井 信雄
14 1月19日	プレゼンテーションを学ぶ	神谷 幸一 株式会社グローバル・エデュケーション
15 1月26日	異業種企業との協働活動のつなぐ	異業種企業家

☆システムコーディネーターコース☆

1	2月9日 10:00-12:00	教室計画を考える 先輩システムコーディネーターの例	林 文洋 株式会社グローバル・エデュケーション
2	2月16日 13:30-15:30	チラシを作る	堀 永乃 株式会社グローバル・エデュケーション
3	2月23日 10:00-12:00	収支予算計画を立てる	税理士
4	2月23日 13:00-17:00	事業目標と事業計画	田村 太郎 株式会社グローバル・エデュケーション

☆プログラムコーディネーターコース☆

1	2月2日 10:00-12:00	教室を作る～何ができるようになるのか～	堀田 和子 株式会社グローバル・エデュケーション
2	2月9日 13:30-15:30	教材分析・教材を作る	堀田 和子 株式会社グローバル・エデュケーション
3	2月16日 13:30-15:30	日本語能力の評価	川原 一博 株式会社グローバル・エデュケーション
4	2月23日 13:00-17:00	事業目標と事業計画	田村 太郎 株式会社グローバル・エデュケーション

教室企画運営・実践報告

●事例1「命を守る日本語教室」

システムコーディネーター1名（ブラジル出身）、プログラムコーディネーター2名

南米系外国人が集住する遠州浜地区は、海岸近くのため災害時の津波被害が想定される地域である。そこで、この地区に在住するブラジル人を対象にヒアリングによるニーズ調査を行い、災害時に役立つ日本語を学ぶ教室を開催。災害時の情報を的確に得られるようになることを目指した。またHUG（避難所運営ゲーム）を実施し、避難所での多文化共生について学ぶ機会とした。

場所 浜松市五島公民館 時間 毎週火曜日 19:00～21:00

協力 白鷺消防署、遠州浜自治会、防災士、保護司、浜松市五島公民館

成果 自治会など地域の日本人住民も共に参加することにより課題の共有と相互理解、顔が見える関係ができた。外国人への指導を初めて行う消防士にとって「やさしい日本語」の使用を考えるきっかけとなった。

内容

- 第1回 「災害が起きる前に / 基本的な知識と言葉」
津波が起きる理由と事前備えについて
- 第2回 「東海地震、避難サイレン、屋内避難方法」
防災DVDを見て震災直後の行動を学習し、防災士に助言を求める
- 第3回 「屋外での安全確保、避難方法や適切な行動」
速報ニュースの漢字、避難所のやさしい日本語、家族避難について
- 第4回 「災害後の安全確保・避難・救出・救護時の日本語」
災害時の応急手当、AED や心臓蘇生、人工呼吸の方法、119番のロールプレイ
- 第5回 「避難所での生活に関する知識と言葉」
強い地震直後の高台への避難方法、避難所の再確認、HUG体験
- 第6回 「新しい津波警報速報によく使われる言葉」
テレビ画面の緊急速報に出てくる漢字を学習。



●事例2「外国人研修生のための日本語教室」

システムコーディネーター1名、プログラムコーディネーター1名

アジア系の外国人研修生は自動車部品工場での夜間勤務をしている者が多く、なかなか同世代の日本人と交流する機会がない。そこで、日本人大学生ボランティアが参加し日本語を活用した交流を深め、日本文化も体験し、生活の質を高めることのできる日本語教室を開催。最終日には浜松市の魅力をもっと感じられるように電ヶ岩河へのバスツアーを企画し交流を深めた。

場所 バレット、グローバル人材サポート浜松、松蔭亭ほか 時間 毎週日曜日 13:00～15:00

協力 遠州鉄道株式会社

成果 本教室では、コーディネーターが常にPDCAサイクルで事業運営を行っていた。当初の参加者が1人という厳しい状態から広報活動の見直し改善を図り見事口コミで受講者を集めた。また企業に対する交渉により、広報やニーズ調査、バス賃の費用軽減など様々な面で企業協力を得ることができた。実際に研修生からヒアリングをして、学習ニーズを把握して臨機応変に内容変更を行うこともした。また、大学生ボランティアと研修生が教室活動のなかでバス旅行や文化体験を話し合いながら決めるようにしたこと、双方の理解と交流が深めることができた。

内容

- 第1回 「自己紹介 / 友達になろう / 折り紙」
研修生の国の文化と日本文化の違いを比較しながら、自分の国の紹介ができる。日本人の興味を引き出す。
- 第2回 「自己紹介 / 丁寧な会話 / 友達同士の会話 / 日本の歌」
相手の立場に合わせた会話ができるようになる。人間関係のきっかけをつくる挨拶ややり取りを学ぶ。
- 第3回 「友達を誘ってみよう / お茶会に参加してみる」
友達を誘って一緒に何かをする約束をすることができる。相手の都合が合わなかった時の対応。次の約束を提案する。
- 第4回 「バスで出かけよう / 書道（好きな漢字を書く）」
大勢の人と行動を共にする際の言葉、指示をしたり受けたりして行動することができる。状況に応じて質問して円滑なコミュニケーションを図ることができ、目的地までの道順を説明し、相手を誘導することができる。
- 第5回 「バスで出かけよう（実践編）」
日本人と自分の国以外の人たちと日本語でのコミュニケーションを深め友達づくりをする。



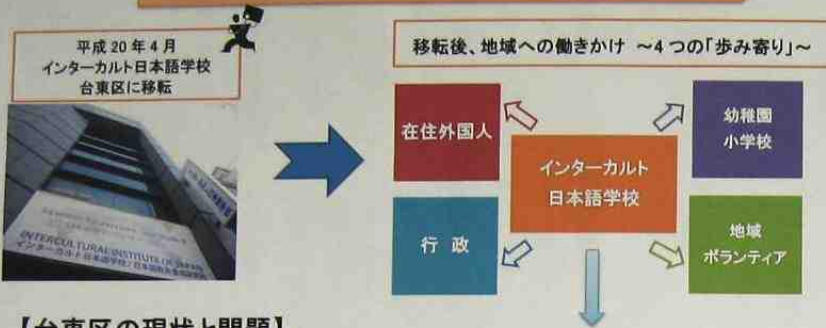
事業成果と課題

日本の少子高齢化から労働力・生活力・経済力のすべてにおいて、地域はその地域に住む外国人の力を活かすことを考えていかなければならない。多文化共生推進が地域の課題を解決する社会活動である。そこで外国人の日本語教育が課題としてあげられる。外国人がその日本語を学ぶことで日本社会で何ができるようになるのか大切である。一方外国人の日本語能力ばかりを問題視するのではなく、日本人の日本語使用能力や配置の不足も解決していかなければならない。そこで、双方の良好な人間関係の構築と地域の課題解決のための事業として、社会に活かす日本語教室が必要で、それをPDCAで運営し事業として推進していくことのできる人材養成が求められる。本事業では、他地域にも汎用できる人材育成プログラムを開発することができた。



平成 24 年度文化庁委託事業
「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
地域日本語教育実践プログラム(A)
日本語教育を行う人材の養成・研修の実施報告

インターカルト日本語学校 谷口直理



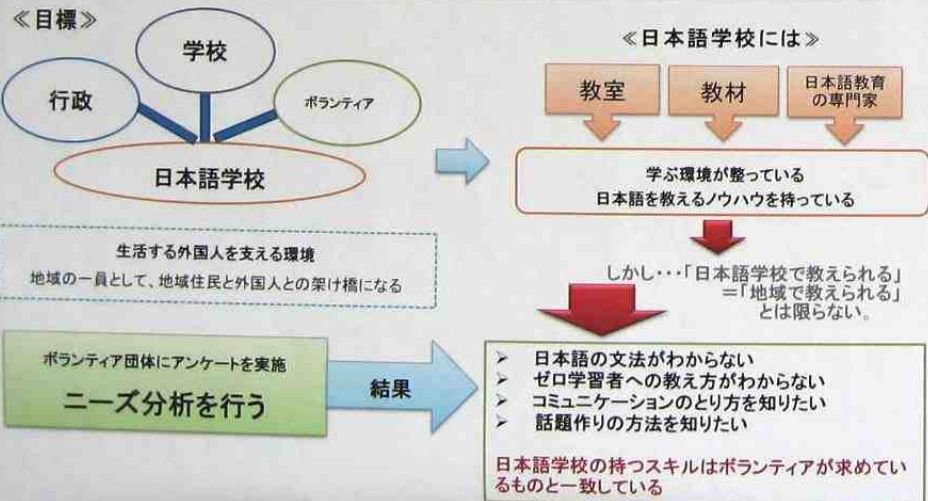
【台東区の現状と問題】

住民基本台帳人口 186,779 人うち外国籍 12,541 人
約 15 人に 1 人が外国人
国籍 ①韓国 ②中国 ③フィリピン ④インド
主な仕事 製造業(インド 宝石商)、飲食店経営 など
他 日本人と結婚

問題1 外国人児童とその親の問題 授業、進学など	問題2 ボランティアの問題 学ぶ場、行政とのつながり
問題3 行政の問題 取り組みなど	問題4 学校の問題 日本語指導、指導員

【日本語学校の役割として考えること】

平成21年度文化庁委託事業「生活者としての外国人」のための日本語教育事業を受託



【人材の養成・研修の取り組み内容】



講座開講までの流れ

講座のプラン作り
内容と講師

広報・募集

- ・台東区交流促進課
- ・国際交流協会に通知
- ・台東区・文京区・墨田区ボランティア団体に挨拶・通知
- ・台東区民向けの新聞
- ・インターカルトのHP

協力先

- ・台東区交流促進課
- ・多数国際交流協会
- ・台東区ボランティアグループ、他
- ・文京区役所
- ・墨田区民活動推進部
- ・多文化共生センター東京

申込み者の内訳

- ・ボランティア
- ・年少者指導員
- ・退職した教員
- ・日本語学校講師
- ・小学校教師
- ・養成講座受講生



講座内容

《平成24年度人材の養成・研修 地域日本語指導者養成講座》

・生活者としての外国人が直面する課題と支援 ~文化庁「標準的カリキュラム案」ができるまで~ ・ちょっと元気になるための教室づくり ~難民等定住外国人出身者と共に~	西原 希子 (国際交流基金日本語国際センター所長) 社会福祉法人 さぼろと21
・外国人と地域社会をつなげる日本語教育プログラムの作成 ~多文化共生を考えるワークショップ~ ・ボランティア教室の立ち上げから今日まで	加藤 早苗 (インターカルト日本語学校 代表) 日本語サークル「こんにちは!」/ひらがなネット株式会社
・地域の実情・学習者の状況に合わせた日本語教育のための教材 ~生活課題の解決、地域住民とのつながり作り、社会参加に向けて~ ・演習・行動・体験中心の教室活動のための教材作成	矢部 まゆみ (横浜国立大学留学生センター非常勤講師)
・日本語学習ニーズと日本語学習支援の在り方 ~生活者の立場から~	李 源 順 (東京都立富士森高等学校 通訳・外国語教育補助)
・体系的に興味をもって語彙を増やす授業 (1) ~日本語能力試験に挑戦「きりり☆日本語 N5 語彙」を使って~	沼田 宏 (インターカルト日本語教員養成研究所 所長) 齋藤 美幸 (インターカルト日本語学校講師)
・体系的に興味をもって語彙を増やす授業 (2) 外国人を対象とした授業実習と振り返り	沼田 宏 齋藤 美幸
・日本語でコミュニケーションができるようにするための授業 (1) ~文型・語彙・表現を自然に身につける「WEEKLY J」を使って~ その考え、授業の構成、方法と理解と実践	坂本 舞 (インターカルト日本語学校講師) 秋山 信子 (インターカルト日本語学校講師)
日本語でコミュニケーションができるようにするための授業 (1) 外国人を対象とした授業実習と振り返り	坂本 舞 秋山 信子

受講者の声

・生活者としての外国人に必要な日本語がどのようなものなのか、標準的カリキュラム案の存在を知ることができ、今後のプログラム作りに役立つと思った。

・地域の実情・学習者の状況などいろんなグループの話が聞けて問題点など共有できたことが良かった。

・日本語ボランティアの意義の大きさ、各々の生徒の必要な助けを把握する大切さ等お話の全てが良かった。

・学習者を楽しませて、発展させ、頭に残す学習方法が理解できた。ボランティア教室で実践したい。

●委託事業(平成24年度実績)

- ・文化庁委託事業「地域日本語教育実践プログラム(A)」
- ・Y市「日本語支援ボランティア講座「基礎編」
- ・Y市「日本語支援ボランティア講座「ノウハウ編」
- ・T区「外国人支援ボランティア養成講座「入門編」
- ・T区「外国人支援ボランティア養成講座「スキルアップ編」
- ・S市「日本語ボランティア養成講座」
- ・T都「語学ボランティア研修」
- ・T都「やさしい日本語技術研修」



ボランティア講座 自立へ

FORWARD 2013

... ..

... ..

... ..



... ..



... ..



... ..



... ..

... ..

